

## 論文の和文要旨

論文題目	リーディング能力構成概念の研究： 日本人英語学習者の読解テストにおけるクエスチョン タイプの影響について
氏名	和田 朋子

本研究の第一の目的は、日本人英語学習者を対象とした英語読解テストにおいて、個々の設問（テストアイテム）に対する学習者の解答の成否により、教師あるいは研究者が、その学習者の英語読解能力についてより汎用性のある解釈を可能にする問題を作成するために、その手立てとなる要因を明らかにすることにある。

言語テスト研究では、学習者の英語能力を構成するさまざまな特性をより有効的に引き出す手法を明らかにするための研究はさかんにおこなわれている。このように、ある一つの能力について理論的枠組みをもとに構築した構成モデルは「構成概念」と呼ばれ、言語能力についても、さまざまな研究者がさまざまな構成概念を提案しているが、大きくわけて2つのアプローチ法によって分類することができる。一つは、テスト開発やその実施段階において、アイテムの作成規準やそれによって測定される能力の記述を含めることを求める「下位能力」を基盤として構築された手法であり、もう一方は、テストの中でおこなわれるタスクのみを記述した「行動」を基盤として構築されたものである。（i.e. Messick 1988, Bachman and Palmer 1996, Chappelle 1998）

本研究では、リーディングテストの開発において、その基盤となる構成概念を構築するためには「下位能力」を基盤とするアプローチをとることを提案している。これは、上述のように、よ

り汎用性のある解釈を可能にする問題を作成する目的のもとでは、そこで用いられる構成概念が定義されるなかで、個々の問題によって引き出される学習者のパフォーマンスを形成する潜在特性の構造が明らかにされることが不可欠だと考えられるからである。

Wada (2003)では、Negishi (1996)をもとに、日本人英語学習者のリーディングテストの解答行動を因子分析を用いて分析し、その結果、日本人英語学習者のリーディング能力は“local/global comprehension”と“literal/inferential comprehension” dimension の二つの因子によって説明されることを明らかにし、それらをもとに、“local/literal”, “local/inferential” and “global/local”という3つの読みを引き出す“question types”の存在を提案した。「下位能力」を基盤とするアプローチ法のもとでテストアイテムの作成をおこなうにあたり、その基盤としてWada (2003)による‘two-dimensional approach’を用いることは妥当であろう。

このように、さまざまなテストアイテムの種類によって、それに応じた学習者のパフォーマンスが引き出されるという観点からテストを研究することを、テストアイテム研究の「質的」な側面とするならば、その「量的」な側面はそれらの行動に付与されるアイテムの難易度だと言える。このテストアイテムの「量的」な側面に焦点が向けられる際にも「下位能力」を基盤としたアプローチは必要不可欠である。つまり、アイテムの難易度は一つの数値などで示されるわけだが、その数値はアイテムによって引き出された学習者行動を構築するさまざまな下位能力をおこなうことに対する難易度の積み重ねだと考えられ、その下位能力に難易度を特定することが可能であれば、アイテム全体の難しさをそれが作成される段階である程度は特定することが可能になるかもしれない。このため、下位能力をおこなうことに対する難易度への研究は不可欠になる。

本研究の実施には2つの要素がある。一つはWada (2003)の提唱する“question types”によってリーディングテストのパフォーマンスを定義しようとするものの、学習者間の能力差への考察を含めた、妥当性の研究であり、もう一つは、それらが「数量化」される際のアイテム難易度との関係の研究である。被験者には日本の高校生および大学生が選ばれたが、これは研究の対象を日本の中等教育が終わるころの学習者の能力としているからである。

本研究では、リーディングテストパフォーマンスを構築する下位能力として、3つの因子が特定された。まず、自分の能力と同じくらいの能力を必要とするアイテムを与えられた上級者と中級者については、両者ともに第一因子はテストアイテムの「位置」(テスト内での順番)であるということが明らかになり、つまりそれは学習者の問題に解答する「速さ」および「集中力」に起因するものではないかと考えられる。つまり、学習者が本人の英語レベルと同じレベルの問題を与えられた場合には、まずは問題の「位置」が大きな要因となることがわかる。

また、上級者が自分の能力よりも下のレベルを想定する問題を与えられた場合は、“local/global”の因子が大きく影響を与えることがわかった。つまり、このレベルの学習者にとっては、情報の収集範囲の広さが大きな影響となることがわかる。

中級者が自分と同じレベルと想定された問題を与えられた場合および上級者が自分の能力よりも下のレベルを想定する問題を与えられた場合には、“inferential”が第二因子であった。上級者が自分と同じレベルと想定された問題を与えられた場合は、第二因子は“local-inferential”の要素であった。

これらの結果により、テスト実施の前の段階で“question types”を定義し、それらによってアイテムの特性を判断することに対する妥当性は否定された。しかし、因子分析の結果より、“local/global”や“literal/inferential”という要因の存在は明らかになったため、十分な被験者およびアイテム数が確保できる場合には、パイロットテストなどを実施し、その後にアイテムの持つ「読み」の特性を特定し、その後のテスト実施に活用することは可能ではないか、という結論に至っている。

“Question types”とアイテムの難易度の関係については、“literal/inferential”の要因にのみ認められ、中級者が自分と同じレベルと想定された問題を与えられた場合には“literal”の読みを求めるアイテムのほうが“inferential”の読みを求められるアイテムよりも難しく感じられ、上級者が自分の能力よりも下のレベルを想定する問題を与えられた場合には、その逆であることがわかった。このことにより、“question types”によりアイテム難易度が影響されることが明らかになり、さらにこの関係は、学習者の英語能力レベルによって変化することが示された。また、同じテストを与えられた中級者と上級者が異なる「読み」をしているということと、「読み」の難易度の関係から総合して推測されるのは、例えば、中級者にとっては読み取った情報から推測をおこなうという読みができることが「中級レベル」における threshold だったとしたら、上級者にとっては情報を広く構築することができるということが「上級レベル」における threshold になっていて、それは上級者が、中級レベルにおける threshold である推測を必要とする読みはクリアできているからであり、だから“inferential”の読みは上級者にとっては第二因子としてあらわれているのだ、という解釈を可能にする。これにより、さらなる研究をおこなうことで、“question types”をもとにしたリーディング能力の指標軸を想定することが可能になる可能性を示唆される。